キリスト教
文学の世界
1

J・グリーン　ジッド

キリスト教文学の世界

1

J・グリーン
JULIEN GREEN

ジッド
ANDRÉ GIDE

筆・訳者紹介

遠藤周作（えんどうしゅうさく） 1923年生まれ。作家。

福永武彦（ふくながたけひこ） 1918年生まれ。作家。学習院大学仏文科教授。

川村克己（かわむらかつみ） 1922年生まれ。立教大学仏文科教授。

上総英郎（かずさひでお） 1931年生まれ。文芸評論家。

若林真（わかばやししん） 1929年生まれ。慶応義塾大学仏文科教授。

キリスト教文学の世界 1
J・グリーン ジッド
昭和五十二年三月五日 第一刷発行
定価一八〇〇円
発行者／石川数雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一—六
郵便番号 一〇一
振替 東京二—一八〇番
電話 東京（〇三）二九四—一一一一（大代表）
印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

©主婦の友社 1977 Printed in Japan 0398—968291—3062

目次

J・グリーン

〈解説〉キリスト教は肉欲を否定するか
——「モイラ」をめぐって——　遠藤周作　5

モイラ　福永武彦訳　22

地を旅する者　川村克己訳　177

人と作品……上総英郎　356

ジッド

〈解説〉「狭き門」はキリスト教小説か　遠藤周作　225

狭き門　若林真訳　242

汝も亦……　若林真訳　335

人と作品……若林真　359

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

J・グリーン

〈解説〉

キリスト教は肉欲を否定するか

――「モイラ」をめぐって――

遠藤周作

私がこの小説を読んだのは一九五二年頃のことでリヨンに留学している夏でした。街の中心にあるベルクール広場にそった本屋でグリーンの新作と書いた帯のついた本を手にとりあげ、買い求めて下宿に戻りました。その日一日中夢中になって読みました。

最初からこの小説に心が惹きつけられたのは第一章に登場するジョゼフ・デイという主人公が当時の私と同じように学生だったためかも知れません。田舎から来たこの青年が自分の住む下宿の夫人と会うくだりは、日本からリヨンに来て大学に入った私の姿とそっくりだったからでしょう。

が、読みすすんでいるうちに間もなく、私は彼と自分とが違うことに気づきました。アメリカの清教徒のなかで育ったこの男の烈しい性格は日本人の私には縁が遠いものでしたし、同じキリスト教でもカトリックの雰囲気に育った私にはこのピュリタニズムの男の肉欲にたいする

畏れやこの男の罪にたいする恐怖はあまりに旧約聖書的すぎて、あかるい新約聖書の世界とは隔りがあるように考えられたからです。この点はあとで説明をしますが、おそらくキリスト教徒ではない読者の皆さんも、一読されて私と同じ気持を持たれただろうと思います。

にもかかわらず、あの真夏のリヨンの下宿の屋根裏部屋で汗まみれになってこの小説を読み終った自分の姿を今でも忘れることはできません。グリーンの他の作品の主人公たちと同じように、このジョゼフ・デイの頭から離れぬ執念は私を次第に悪夢のような世界に引きずりこんでいったからです。グリーンは執拗なまでに、ジョゼフの妄念をたどりますが、この妄念の行きつくところが何処かは、小説の途中で我々読者にもわかってしまうのです。にもかかわらず、本を途中で放り出してしまうわけにいかない。それほどの迫力が一頁、一頁にこもっています。我々は主人公ジョゼフと同じように眼前に瀑布があるとわかっていながら、そこに押し流されていくのを、どうすることもできない。そこまでの力をこの小説に与えたのは、おそらくグリーン自身がジョゼフの苦しみを味わいつくした時期があったからでしょう。

グリーンは米国のプロテスタントの家庭に育ちましたが、カトリックの洗礼を受けたのは十五、六歳の頃です。母の死は彼に大きな影響を与えましたが、その時、一人のカトリック司祭を知りました。グリーンが回宗したのはこの司祭の影響によるものです。カトリック信者になってもグリーンは、ちょうどこの小説のジョゼフ・デイのような苦しみを味わったのかもしれません。この作家のなかにはカトリックが克服した暗い宿命感や神への恐怖感がいつまでも残っていて（それを私は旧約的だと言いたいのですが）回宗はしたものの、その観念がつきまとっていたように見えます。

中庸を得た、なまぬるい信仰には耐えられなかったグリーンは一時、聖職者になろうとしま

したが、一方ではこの「モイラ」の主人公さながらに神への信頼よりは、神に背く恐怖、永遠の地獄への怖れが強まり、それに耐えられなかったのか、一九一八年頃から徐々に信仰を棄てていきます。ジョゼフ・デイ的な分裂をグリーン自身はきっとこの頃、味わったにちがいありません。

カトリシズムから離れても、グリーンのなかには永遠の地獄の観念や、神の罰の恐怖は形をかえて残りました。

君は主を、大いなる平安のうちに愛している、が僕にあるのは神の怒りなのだ。……君には地獄の何たるかとても分らないだろう、が僕は知っているのだ、僕はそれが火であることを知っている……神の非存在の恐怖というものも、やっぱり火によって、黒く燃える火によって表わされる。（P 149）

いみじくもジョゼフが覗いたこの黒く燃える火の世界、神がいないという恐怖感は棄教したグリーンの作品にはっきりあらわれています。その感覚が彼に「閉された庭」や「漂流物」というような悪夢的世界を緊迫した構成のなかで描かしたのです。こうした小説のなかでは彼の作中人物は、ほとんど自由意志がないままに運命に押しながされていきます。もがいても絶叫しても目にみえぬ妄念が彼等を深淵まで連れていきます。「モイラ」のジョゼフ・デイもある意味では同じでしょう。

狂気のようなグリーンの世界はおそらく日本の読者には少しなじめないと思います。同じ妄念のとりこになって悲劇的運命をたどるバルザックの「ゴリオ爺さん」のような小説のほうが

まだ近寄りやすいかもしれません。日本人の眼にはこの作品のジョゼフ・デイは狂信者にうつるでしょう。とは言っても彼の苦しみの誠実さや求道心は疑うことはできますまい。

ともあれ、作者グリーン自身もさまざまな方法でこのジョゼフ的な苦しみから逃れようとしました。彼は一時仏教や印度思想を勉強しています。しかし結局それも空しかったようです。その頃、カトリックの哲学者、ジャック・マリタンと仏教や印度思想について話しあった頃から、彼はふたたびキリスト教を見なおしました。彼の苦しみである宿命感や地獄や神の恐怖をキリスト教がいかに克服してくれるかが、それからの彼の問題になりました。

私は「狭き門」の解説で、あのアリサには神にたいする信頼感が欠けている、自分の力と努力にのみ信頼をかける姿勢をわかりやすく分析しました。新約聖書のなかには娼婦や長血を患う女たちがイエスの限りない優しさに救われたというような話がいくつもあるのに、アリサはそれらをまったく無視していることを指摘しました。ふしぎなことに、この「モイラ」の主人公ジョゼフも同じように私には見えます。小説を読みながらジョゼフが口にする聖句に注意してごらんなさい。それは、ほとんどが旧約聖書の言葉なのです。旧約の性格を単純には定義できませんが、それは怒る神、罰する神、裁く神を対象としたユダヤ人の神の歴史だとも言えます。神は旧約のなかで優しい面も見せますが、多くの場合、自分に背く者を裁き、怒り、罰を与えています。イエスはそのような神の厳格なイメージを新約聖書のなかで我々に変えてくれました。イエスの説く神は悔いた者、自分のどうにもならぬ弱さに苦しむ者を許し、その泪をぬぐってくれる神のイメージをも持っています。だがジョゼフ・デイが信じている神はなんと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それと違っていることでしょうか。ジョゼフの神は本質的に旧約の神なのです。

その上、アリサとジョゼフには共に神への信頼感が欠けている点では共通したものがあります。アリサは自分の努力によってのみ、神に近づけると考え、神の愛や恩寵にすがるという気持が少いですし、ジョゼフはジョゼフで自分を責めること、他人を裁くことで正しい道、義の道、選ばれた者の道を歩めるのだと考える同じような傲慢さがあります。

彼は許さない。自分の罪も許さなければ他人の一寸した過ちも許しません。この赤毛の男は時として荒野にあらわれ、縄を腰にまいて人々に神の罰の近きことを説いた烈しい予言者ヨハネを我々に連想させます。予言者の持つ情熱的な性格と微温的な生き方にたいする嫌悪感が彼をたえず駆りたてます。ジョゼフはそれゆえに自分をとりまくすべての人間に一寸した弱さでもあれば、それを怒るのです。イエスは弱いものにも限りなく愛を示しましたが、ジョゼフは弱い者に寛大であることもできません。同じ下宿のサイモンのような気の弱い学生を軽蔑し、嫌う彼は、やがてこの仲間を絶望させ、自殺させてしまいます。自殺させても、その遠因が自分にあったとは気がつかないのです。

自分の非も烈しく責めると同時に、他人の弱さや過ちも許せない彼はいわば自己破壊（自殺）か、他者破壊（殺人）の可能性をもった人間だとも言えます。おそらく若い頃のグリーンもまた、こうした傾向を持つアメリカ・ピュリタニズムの雰囲気のなかに育ったのでしょう。グリーンはパリで生れ、後年、フランスで生活しましたが、父も母も米国人で、彼自身もヴァージニア大学で学生生活を送っています。その祖先が新教徒だったせいか彼の血液のなかにはカルビン派的、あるいはジャンセニスト的なものが流れ、こうした宗派から肉欲にたいする極端な罪障感や恐怖感があったように思えます。それは同じくプロテスタントの家庭に育ったジ

ッドのある面を連想させるものです。「私はいつも肉欲のない生に憬れた」と日記のなかでグリーンは書いていますが、肉欲にたいするこの恐怖はやがて女性を罪の根源とみなす考えを生み、彼をジッドと同じようにホモ的な傾向に走らせたことは興味のある問題です。

ジョゼフのなかにも若い頃のグリーンと同様に肉欲にたいする嫌悪感と女性を罪の根源とみなす考えがひそんでいます。彼は自分の肉体や性欲、情欲を起す女に怒りと同時に恐れを抱いているのです。シェクスピアの戯曲にさえ顔をそむけようとするジョゼフは、自分の肉体や肉欲を断ちきることが、神への道だと思いこんでいます。だが不幸なことには、ジョゼフは性欲もまた人一倍強い男でした。彼の髪は赤毛でしたが、赤毛は西洋では普通、性欲がつよいとよく言われています。ジョゼフもその強い体力と共に性欲の烈しい青年だったのです。彼はそのために自分の肉体に怖れを感じ、またその肉欲を刺激するいっさいのものに恐怖感を感じるのです。同じ学生たちの学生らしい猥談にも耳をふさぎ、心を傷つけられるのは本当に潔癖なためではなく、実は自分の肉欲がこわくてならぬからです。彼が卑猥な動作を冗談まじりにしたマック・アリスターをバンドで夢中で撲るのも実はそれに刺激される自分の性欲が怖ろしかったからです。いや、それどころではない、ジョゼフはただ一人の友人であるデーヴィドの婚約さえ認めることはできないのです。

――デーヴィド、その結婚はやめるように決心してくれないか。結婚は危険な誘惑なのだから。

――何を言うつもりなんだ？

――僕の言いたいことが君に分らない筈はないよ、とジョゼフは眼を光らせて言い続けた。

肉体、肉体の快楽、それからそいつが予想させるすべての不潔なもの……。

――黙り給え！　とデーヴィドは身を振りほどいて、叫んだ。

――君がそのひとを引き寄せた時に、君は神のことを考えていられるだろうか？

いかなるピュリタンもこんな極端なことまで言わないでしょう。ピュリタンたちも正当な結婚と夫婦の愛は認めているからです。この主人公ジョゼフには、すべての女性はあのアダムを誘って罪の木の実を食べさせたイヴにしか見えません。キリスト教がこのイヴを超えたものとして聖母マリアという存在を我々に示していることをジョゼフはこの時すっかり忘れているのです。彼にとって女性はすべて男を罪にさそう誘惑者であり、罪の元となる存在なのです。彼は聖書をふかく読んではいますが、その聖書のなかでイエスがカナの町で友人の結婚式に出席し、新夫と新妻との幸福を願ったという話を無視しています。

肉体と肉欲は徹底的に悪であり、女性もその肉欲を挑発する者であるゆえに悪であるという妄想が、ジョゼフをいつも苦しめます。悪は憎まねばならぬ。その憎しみは当然罪をもった人間の破壊につながります。ジョゼフの眼にはいつも、破壊の衝動がどこかうかんでいたのでしょう。彼が下宿についた日から、学生プレーローはそれを感じとったのでした。プレーローはある意味ではジョゼフと同じ性格を持つ男でしたから、誰よりも早くこのジョゼフの危険な秘密を嗅ぎつけた。彼はジョゼフにこう言います。

――とにかく僕はもう君の顔を見たくないんだ……。

――一体何を僕に含んでるんだ？

――何もないさ。だが僕の話はまだ終っちゃいないよ……君の心のなかには人殺しがいる。（P 40）

人殺し。それはジョゼフの運命を予言する言葉ですが、人殺しというのは同時に人間性を拒殺する者だと言う意味でもありましょう。肉体を憎み、肉欲を憎み、女性を憎むことは人間性を破壊することに他ならないからです。

ランプがともされた時、眼にとまったものが思わず彼に感歎の叫び声をあげさせた。勉強机の真中に、木蓮の大きな花が一輪、薄青い一葉の紙の上に置かれて、真珠母と雪とを思わせる深沈とした色相（いろあい）を見せていた……我を忘れた唐突な動作で、ジョゼフはそれを握りしめ、貪るように顔にはこぶと、唇と眼とに当ててこの白く甘美な塊りを押し潰した。（P 60）

この描写もジョゼフの破壊的な本能をみごとに暗示しています。この場面を読んだ我々は大学生プレーローの言葉を待つまでもなく、やがて主人公が誰かを殺すだろうと予感します。やがて、元の下宿にモイラという混血の娘が戻ってくる。その娘が犠牲者になるであろうことも我々にはわかっています。それほど、ジョゼフの妄執は烈しく、直線的でそこから逃げることができぬものだからです。友人のデーヴィドの友情や忠言も彼には何の役にもたたない。デーヴィドはこの小説でピュリタンと言うよりは、むしろカトリックに近い考え方をしていますが、その彼もジョゼフの圧倒的な烈しい性格にはどうすることもできません。ジョゼフの生き方には自由がない。彼は自己破壊（自殺）か、他者破壊（殺人）のどちらかの破局に向って、

真直に進んでいきます。（しかも悪いことには彼は自分が「選ばれた人間」であるという選民意識の傲慢を持っています。この傲慢の上に彼は他人を救おうという使命感を抱いているのです。）当然彼は我々が予想したようなことをやった。ジョゼフはモイラをシェクスピアのオセロのように殺したのです。

このようにこの小説ではジョゼフをまるでそのピュリタニズムの操り人形のように描いています。しかもそれが神への志向という形でなされているので、皆さんは読み終ってきっと慄然とされたにちがいありません。のみならず神はジョゼフのこの宿命の歯車を狂わそうとし給わなかった。神はジョゼフがモイラを殺害するまで沈黙しておられた。

グリーンはこの小説の第二十三章に〈されど神は一言も洩らしたまわず〉と言うロバート・ブラウニングの句を書きつけています。だが本当にそうなのか。

たしかに、この小説のなかでは主人公ジョゼフの人生にたいし神はなんの手も差しのべていないように見えます。ジョゼフの考えはともかく彼の生き方は必死ですし、それ自体は誠実そのものでした。にもかかわらず彼が破局に向って押し流されている時、神はそれをじっと見つめておられるだけのように思われます。だから日本の読者の方はこの小説に神の沈黙という別題をおつけになりたくなるでしょう。無慈悲な神、何もしてくれぬ神、冷酷な神をそこにお感じになるでしょう。

だが、果して、神は一言も洩らさなかったのか。神はただ黙っておられるのか。読み終ったあと、我々が考えねばならぬ問題がやっと出てきました。

しかしその前に断っておかねばならぬことがある。グリーンはキリスト教の作家です。しかしキリスト教の作家であるからと言って、彼がキリスト教の宣伝や護教（教えの真理を証明すること）のために小説を書くなら、本当の作家とは言えない筈です。キリスト教の作家といえども他の非キリスト教作家と同じように人間の真実、真実の人間を描くことが使命です。彼にはキリスト教の宣伝のために、この人間の真実を避けたり、歪めたりすることは絶対に許されないのです。彼はどんな罪の世界でも、それが人間の真実ならば直視する義務があります。キリスト者としては見るのを避けたい人間のおぞましい部分にもある意味で共犯者ならざるをえない――そこにキリスト教作家の悩みと矛盾とがあるのです。

グリーンもキリスト教の宣伝作家や護教作家ではありません。彼はこれを書きながら、どれほど主人公ジョゼフが救われることを願ったでしょう。破局に至らぬことを希望したでしょう。しかしこの小説ではジョゼフは必然的に破局に向わねばならなかった。作者といえどもそれが人間の真実なら、その方向を勝手に歪めることは許されなかった。それはこの全集でやがて発刊されるモーリヤックの「テレーズ・デスケールー」でも同じなのです。「テレーズ・デスケールー」では一人の人妻が次第に罪に沈んでいく過程がみごとに描かれていますが、モーリヤックは執筆中、彼女に神の愛の光が照らされる場面を織りこもうとして、どうしても作品のなかでは出来なかった、と後になって語っています。

だからと言ってモーリヤックはその女主人公が救われぬとは絶対に思ってはいない。その証拠にはモーリヤックはこのテレーズを何度も何度もその作品に登場させています。それはキリスト者として作者は神がどんな人間にも救いの可能性をいつも与えておられることを知っているからです。「モイラ」でも同じことです。作者は主人公ジョゼフが救われぬとは決して考え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com